好きになんてならない！

はっさく君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
好きになんてならない！

【Ｎコード】
Ｎ６６００Ｘ

【作者名】
はっさく君

【あらすじ】
「振られた！」牧野（まきの）　直美（なおみ）２２才。クリスマスの夜、小柄・童顔を理由にこっぴどく振られた。「あんなヤツに、ほだされちゃった、あたしがバカだった！あたしのかわいい恋心返せ～。」※イジられてんのか？可愛がられてるのか？モテてるのか？遊ばれてるのか？シリアス？コメディー？ラブラブ？直美の明日はどっちだ！？※※※※　トラブル続きで、なかなか進展しません。３歩進んで２歩下がる？気の長い方、どうぞおつきあい下さいませ。ませ。　※※※※　処女作です。よろしくお願いいたします。　※※※※　本編は

ただ今〜恋愛注意報発令中〜です。

01. ◆ 告白。（前書き）

完結できるよう、頑張ります！

01. ◆ 告白。

「俺が？」

行き交う車のヘッドライトが、２人を照らしては過ぎていく。

「君と？」

高い位置にあるその男の眼（まなこ）が冷気を帯び女を射抜く。

「冗談だろ？」

不機嫌なオーラをまとった男の、嘲笑う片側だけ器用に上がった口元から、目を逸らせずにいた。

「君相手じゃ、勃たないね。」

今日、この瞬間、彼女の中にあった淡い想いは、男の視線に凍り付き、男の言葉によって砕け散った。

Misfortune!（不幸）

The next fight …?（次の戦いへ）

01. ◆ 告白。（後書き）

よろしくお願いします。＞（＿＿）＜

02. ◆ 振られた！

玄関の鍵を開ける音がした。飯塚七海（いいづか　ななみ）は、チラリと壁の時計に視線を移した。

――もうこんな時間…。

いつもより少し遅いルームメイトの帰宅に、労いの言葉をかけようと思ったその時、部屋のドアが乱暴に開かれた。七海はその音にビクッと体を踊らせ、恐る恐る振り返った。

「な～な～み～ぃ」

部屋の入り口には、髪を振り乱し、目を血走らせた牧野直美（まきの　なおみ）が仁王立ちしていた。両手に重そうなコンビニ袋をぶら下げ、息づかいもこころなし荒い。その姿に七海はビビって若干引いた。

――な、何事??

引きつった顔をしたまま、いつもと様子が違いすぎるその姿に目をそらせずにいると、次の瞬間、直美は、七海の胸に飛び込んだ。

「な～な～み～ぃ～～～」

「ぐえっ」

七海は衝撃に耐えきれず、ラグの上に転がった。いくら直美が小柄な女の子とはいえ、馬乗りになられたらどうにもならない。

「な、直美。ちょっと…」

体勢を立て直そうと肘を付いたが、直美は七海をしっかりホールドし、豊満な胸に顔を埋めている。

一体どうしたものか。と途方に暮れかけた時、か細い声が聞こえてきた

「――――れた。」

「え？何？」

聞き取れず、思わず問い直したその時、直美はぐわっと、顔を上げた。

「振られた！」

大声で叫んだ直美に驚いていると、みるみるうちに彼女の目からは涙が溢れてきた。

「振られた！振られた！振られたぁ～！うわぁ～ん」

子どものように泣き始めた直美の背中に手を置いて、七海は優しくなでる。

直美は、時々ふるふる顔を左右に振り、柔らかい胸を堪能…いや、溢れる涙を拭っていた。

セーターは既に、直美のそれでベトベトだ。

――はぁ…近所迷惑。苦情とか、来ないでしょうねぇ。

呆れ気味の七海は彼女の心配よりもそのあまりの声量に、どうでも

良い事を考えてしまった。

「えぐっ、告白、す、するつもり、ながっだ、ながったの。」

直美は、ボックスティッシュからティッシュを何枚も引き出し目元の涙をぬぐっていた。

「そうだよね。そんな話はしてなかったもんね、昨日まで。」

直美の涙と（認めたくはないが）鼻水でぐじょぐちょになったセーターを着替え、居間に戻ってきた七海は直美の向かいに座った。もちろん“こたつ”を挟んで。

何故なら、直美の使用済みティッシュは彼女の周りを取り囲んでおり、足の踏み場がないからだ。さらに着替えたトレーナーまで汚されてはかなわないので、少し距離を置いた。

「で、でぼね…会社がらの、がえりびじ、ひ、ひどりでがれがあるいでで…」

チーンと鼻をかんで丸めて捨てる。そのティッシュの行方を気にしつつ、直美に視線を戻した。

「後ろ姿を見ちゃったら、我慢できなかったの！気持ちがこう、ぶあって、ぶあってなって…」

また、新たにティッシュをボックスから引き出しながら直美は目頭を押さえ叫ぶ。

「好きです～。って言っちゃったの～。」

うわーん。とテーブルに突っ伏した直美からは、悲痛な叫びと嗚咽と鼻をすする音がローテーションで木霊した。

――しかし・・・直美のこんな姿を見るのは珍しいわね。いつ以来かしら？

七海の中学からの友人である直美はいつも太陽のように明るく、からから笑う。彼女の周りはいつも楽しそうで、引き寄せられるように人が集まる。とかいう七海もその一人である。転校してきた七海の一番最初の友達になってくれたのも彼女だった。

「・・・・・・ゅ」

「え？」

大好きな友人と大好きなバスケに明け暮れていた日々をぼんやり思い出していて、直美のつぶやきを聞き逃した七海は、あわてて聞き返した。

「ティッシュがない ゛。ボックスティッシュ～」

「あ。あ～、はいはい。」

よっこらせっ。と七海は立ち上がり、脱衣所へ向かう。洗面台の扉から買い置きのボックスティッシュを1箱取り出し、ちょっと考えてもう一箱取り出す。ふむ。と納得して居間へ戻ると、直美はバリバリ音を立ててポテチを貪(むさぼ)っていた。

「はい。ティッシュ。」

七海から2箱ボックスティッシュを手渡された直美は、ブチブチ封を切りティッシュを取り出し、再び鼻をかんだ。丸まるティッシュは地域指定のゴミ袋に入れられ、いつの間にか手にしているビールを、グビグビ飲み出す。
直美の周りにあった、あれだけ散らかっていたティッシュは綺麗にゴミ袋に片づけられていた。
その代わりこたつには、コンビニで買ってきたと思われるビールとおつまみが山になっている。

――どうでもいいけど・・・するめ、げそ、イカフライ、チーズイカ。イカばっか！

ちなみにポテチは期間限定“イカ墨味”。
つまみの偏り具合に少し呆れて直美を見ていた七海は、無造作に置いてあるビールに手を伸ばした。

「ナオの失恋に乾杯。」

くさいセリフを吐いて七海が軽く缶を掲げると、直美は2本目の缶を合わせた。

「で？　な・ん・て　振られたの？」
「う〝っ」

互いがビールをぐびりと飲んで、一息ついた時、爆弾が落とされた。
いきなり核心を突かれて、ビールを吹き出した直美は、手元のティ

ッシュで慌てて口元を拭う。垂れた雫も拭いながら、ゆるゆる視線を七海に合わせすぐ伏せた。
七海はふんぞり返る様な様(さま)で直美を問いただす。

「ただ振られただけで、そんな風にならないと思うんだけど？」
「えっと…その件に関しましては～、是非黙秘権を使いたいと思ってオリマス。」
「ふ～ん。」

じっとりした目で見つめる七海に対し、直美の目は泳ぎっぱなしだ。

「じゃあ、質問を変えます。相手はあの人？えっと、何だっけ…営業の主任だっけ？」
「…うん。」
「仕事に厳しいけど、優しい人だって、言ってなかった？」
「…」
「あんた、振られて泣いてると言うよりも、告白した事を後悔して泣いてるように見えるんだけど。」
「う〝っ」
「優し～い人が、どんな風に直美ちゃんを振ったのかな～？」

――う～、七海スルドイ。マズイ。吐かされる。

部屋の雰囲気が、取り調べ室の様になってきてしまった。しかし泣きついてしまった以上、直美は答えないわけにはいかなかった。もちろん、出来る範囲でお願いしたい。とてもあの惨劇を伝える事は出来ない。
直美は、流れ落ちるビールの水滴をじっと見ながら大きく息をつくと、ぼそぼそつぶやいた。

「――だってさ、澤主任って、大福アイスみたいな人だと思ってたんだもん。」
「大福アイス？」
また、おかしな表現だと、七海が続きを促すと、直美はちろっと視線を合わせすぐ伏せた。
「大福アイスってさ、こう、かぶりつくとさ、外身（そとみ）はちょっと柔らかい感じがするじゃない？それでもって、ちょっと油断すると、すぐ中に冷た～いアイスがあってキーンとする。けど、実は甘くて優しい味で、思わずほっこり自然に笑みが浮かんじゃうような、そんなおかしでしょ。」
「うん？」
「澤主任は、そんな人だと思ってたの。」
「そう。」
「かっこ良いんだけど、とても冷たく見える人なの。常に冷静で、表情筋ホントにある？って位表情も顔色も変わらない。仕事にも私生活にも厳しくて、でも…」
「うん」
「温かいトコ、見ちゃったの。甘くて、ほっこり笑顔になっちゃうそんな姿。見ちゃったの。」
だから好きになっちゃった。直美は顔を上げ七海を見て微笑んだ。それは、随分さっぱりした笑顔だった。
「そう。」
七海もつられて笑った。直美の見る目は確かだ。きっと、ステキな人だったのだろう。明るさを取り戻しつつある彼女の姿に少し安心した。

「でも、幻想だったわ！」
「え？」
「あの冷徹魔神。大福アイスなんてとんでもない。あんな奴、業務用のブロック氷よ！」
「ブロック氷…」
「そうよ。カッチンカチンで、冷たくて、ガリガリ削っていっても中身も冷たくてカチンカチン。」

ヒートアップして、ドン！とこたつを叩き、チーズいかを貪り始めた直美に、七海はたじたじになってくる。

「あたしの目は、節穴だった。奴はやっぱり噂通りの男だったのよ。冷たい、ただの堅物よ！」

そうだ！と叫び、直美はいきなり手を打ち立ち上がる。台所へ走っていく彼女をビクビクしながら見ていると、やがて床下収納から、一升瓶を持って帰ってきた。

「うふふふ。今日は、コレを開けよう。」

満面の笑みで、2人分のグラスに、それを注ぐ。
七海は息を飲んだ。

――故郷の地酒、銘酒“地獄車”…直美、やる気だわ。

明日は日勤なのに今夜は眠れないかもしれないと、七海は今日という日を諦めた。

時計の長い針が、1周した頃、未だ2人で“地獄車”を煽っていると、ほんのり頬を赤く染めた直美がボソリとつぶやいた。

「ナナはいいな。美人で、モデルみたいで、その上白衣の天使。世の男どもはメロメロだよね。」

――なるほど。

七海は理解した。きっと直美はその容姿のせいで振られたのだ。自分が綺麗系だといわれるのに対し、直美はかわいい系だとよく言われる。彼女は150？弱（正確な数字は教えてもらえない）と非常に小柄で、しかも童顔。23才になった今でも、お酒を買う時身分証明書を要求され、夜、街を歩けば補導される。

――ん？誕生日まだだな。22才か。しかし、直美の思い人は、容姿を気にするような肝のちっちゃい男だったの？

直美の一方的な惚気っぷりを聞いていた限りでは、とてもそんなタイプには思えなかった。

会社じゃ、“氷の貴公子”と呼ばれているほど、男前らいしが…

――恋は盲目だから？いや、直美は男運は無いけど、見る目はある。…はず。

「そんな、らしくない事言って拗ねないで。私はナオを心から尊敬してるよ。知ってるでしょ？」

目元を緩めながらやさしく微笑む。

直美は努力家だ。同じバスケ部に所属していて、嫌と言うほど見て

きた。周りの子達が直美の背を追い抜かし、選手として使われなくなっても、決して諦めなかった。誰よりも早く、そして誰よりも遅くまで練習していた。早朝と深夜、人知れず河原で走り込んでいたのも知っている。だから彼女はキャプテンになった。レギュラーでない事を理由に顧問は渋い顔をしたが、部員は満場一致。気配りも出来、仲間を大切にする彼女を、同学年だけでなく、先輩も後輩も支持したのだ。

「ナオはいい女だよ。自信持って。」

ずっと俯き“地獄車”ちびちび飲んでいた直美は、ゆっくりと視線を上げた。

くりくりした瞳にまた涙がたまる。

「ほんど？」

「うん。ホント。」

「ぜったい〝？」

「うん。絶対。」

「……う〝〜。な〝な〝〜。大ずぎ〜。ありがど〜。」

直美は手元のティッシュを大胆に引き抜きまた、鼻をかんだ。

丸めてゴミ袋に入れると、イカフライをバリバリ貪る。“地獄車”は既に空に近い。

直美は、幼く見える容姿と反比例して、中身はかなり男前だ。さばさばしていて、立ち直りも早い。きっと明日には笑顔がみられるだろう。

そう希望しつつ、七海は、イカチーズに手を伸ばした。

「てか、ナオ。泣くか、鼻かむか、食べるか、飲むか、どれかにしてくれない？？」

＊＊＊

直美が叫ぶと、間をおかず隣の部屋から声が飛んできた。

Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ！（幸運を祈る）

Ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｆｉｇｈｔ　…？（次の戦いへ）

０２．　◆　振られた！（後書き）

「あたしだってね～、全然もてなかった訳じゃあないんだよ？」
「ふ～ん。例えば？」
「例えば…」
「うん」
「例えば…」
「ああ、肉屋の源さん（５５才）とか、八百屋の次郎さん（７０才）とかは却下ね！」
「…」
「あと、グランドゴルフの会のメンバー（平均年齢６５才）とか、楽しい囲碁の会の皆さん（平均年齢６０才）とかも。」
「…」
「あぁ！　学くん（５才）や聡くん（１０才）も却下。犯罪だから。」
「…」
「で、誰？」
「スイマセンでした」（Ｔ＿Ｔ）

03．◆ vs． 冷徹魔神？（前書き）

うおっ！こんなにたくさんアクセスしていただいているとは！（＜＿＞）
お気に入り登録も！ありがとうございます。
一緒に、直美の恋を応援して下さい。
これからも、よろしくお願いいたします。＞（＿＿）＜

03. ◆ vs. 冷徹魔神？

「あけましておめでとう。皆さん良いお正月を迎える事が出来たでしょうか。
年明け早々申し訳ないが、我々の総務部は気を引き締めねばなりません。経理課は、来るべき決算に向けて、また総務課は、株主総会に向けて。またまた人事課は、来期新入社員を迎える準備に忙しくなるでしょう。残業や休日出勤も続くでしょうが、皆さん。力を合わせて頑張りましょう。」

仕事始めの朝礼で、横山総括部長が檄（げき）を飛ばした。実際正月ボケをしている暇はない。
彼が総括している総務部は、経理課・総務課・人事課とあり、直美が所属する経理課は決算を控え、猫の手も借りたいほど忙しくなる。
直美はうんざりした気持ちで、去年の決算を思い起こしていた。

＊＊＊

『関係なくないわよ～。』

熱燗をちびちびやりながら、ちらりと直美に視線を移すと、にたり。と笑う。

横から直美の指導員で2期先輩の山口　悟（やまぐち　さとる）が口を挟んだ。

『うちの決算って、独特なんですよね？主任。』

『えっ。やっぱそうなんですか？』

2人で食いつくように見ると、枝豆をつまみながら綾乃主任は口を開いた。

『もうず～～っと前、うちの会社が大きくなり始めた頃に、税務署が入ったのよ。当時は、先代の会長の奥様が経理を仕切ってらしたんだけど、会社の成長スピードに追いつけなかったのね。指導を受けちゃったの。故意でもないし、悪意も無かったんだけど、せっかく築き上げてきたものを、妬みや中傷で失いかけてしまって…それで時間とお金をかけて、今のシステムを作り上げたのよ。だから、うちの会社は経理を大事にする。社内での発言力もあり、待遇良いし、給料も良い。他の会社に比べたらね～。』

だから、我慢しなさ～い。綾乃主任は直美にデコピンすると、空の徳利（とっくり）を振った。直美は慌てて熱燗の注文のため席を立った。

＊＊＊

年末もとても忙しかったのだが、年明けの比ではなかった。直美はとても目まぐるしい日々を送っていた。
年末の、“うっかり告白して振られちゃったぞ♪”事件の事を、忘れたふりが出来る位には…
本当に忙しく、疲労もたまってきた1月の終わりに、事件は起きた。

「ですから、これを受理するわけにはいきません！」
急に張り上げられた声に室内に緊張が走る。
一同は、弾かれたように声のする方に注目し、そして固まった。

《《　げっ。澤主任…　》》

経理課は銀行のように受付カウンターが設けられていて、課の人間以外、決してデスクには近づけないようになっていた。そのカウンターの向こう側で、ただならぬオーラを醸し出している人間がいる。営業２課　澤　重治（さわ　しげはる）　御年３０才。営業成績トップを誇る我が社の稼ぎ頭だ。何の感情も見せず、マシーンの様にぱきぱき仕事をこなすその姿に、男性は憧れ、女性は黄色い声を上げる。
ぱりっとしたオーダーメードのスーツを着込み、程よい長さの髪は後になでつけてあった。切れ長の目、端正な面持ちである彼は身長も１９０ｃｍあるという。しかも独身。こうまで好条件な男では、女性がほっとかない。当然もてもてだ。他社の美女と浮き名を流そうと、仕事に厳しかろうと、態度が冷たかろうと“そんなの関係ないわ。手に入れるのは私よ”とばかりに、妙齢の強者の女性達は、常にギラギラした目で彼を追って、その他大勢は、離れたところで

頬を染めていた。
人呼んで、『氷の貴公子』この会社で5本の指に入る超優良物件だった。

「急ぎだ。連絡はいってるだろう。」
「伺っておりますが受理できません。この場合、課長以上の判が必要です。」

ピキッ。…空気が凍った気がした。
今まさに、澤と対峙しているのは牧野直美。
今日のカウンター当番は、彼女だった。

2人の姿は、まるで巨人と小人。

一同からは直美の後ろ姿しか見えないが、澤の顔はよく見えた。片眉を上げ不快感を全面に出している。
彼らは一瞬考えた。あれ？何故だろう。室内の温度が、どんどん下降していく…気がする。しかし、結論はすぐ出た。冷気を出し、室内温度を下げているのは紛れもなく澤だ。

「この書類には不備があります。受理できません。」
「…課長は出張で不在だ。明後日にしか出社しない。」

溜息混じりで呆れたように答えてはいるが、澤の目からは、ずっとツンドラビームが出ている。
直美は、挑むように睨み返していた。はるか頭上から、その眼力で脅され、無言の圧力をかけられても、絶対に引くわけにはいかない。
経理マンのプライドにかけて受け取れない。

「そちらの都合は関係ありません。受理出来ません。」

見下ろす澤の冷たい視線と、見上げる直美の燃える目がぶつかる。その緊張感に、一同は全く動けずにいた。室内はもはや、ブリザード状態だ。
誰もが、息苦しさに顔を歪ませた。祈るような気持ちで『頼むから受け取ってくれ。』と心の中で叫んではいるが、一人も口を開く事が出来ない。彼らに目すら向けられなかった。今、目があったら凍ってしまう。ただ息を、気配を殺し、耳だけ2人にに集中していた。

「山口さん。」

事態が膠着(こうちゃく)したかに思われたその時、直美は澤から視線を逸らさぬまま、先輩の山口を徐(おもむろ)に呼んだ。

「ひへっ。」

ビクリと体を震わせ、山口は言葉にならない声を上げた。山口は縋る気持ちで辺りを見回したが誰も目を合わさない。

――うわ。僕見捨てられた。

がっくりする気持ちを押し殺し、一瞬の迷いの後、決意を秘めた面持ちで2人に近づいていった。
澤の前に躍り出た山口は、１９５?ある為澤より少し大きい。…はずだったが、漂う重い空気に気圧され、小さく縮こまってしまった。彼はしばらく目を泳がせていたが、意を決して大きく息を吸い込んだ。

「な、何かな?牧野さん。」

山口の声が裏返ってしまったのは、許して欲しい。本物の勇者しか、この場で平常心は保てないのだ。

「これ、課長以上の承認が必要ですよね。」

直美はぺらりと書類を山口の前へぶら下げた。その間も目線は澤から外さない。

――え～。それ僕に聞くの？牧野さん。

山口は書類に視線を落とし、澤をのぞき見た。そして、ヒュと息を飲んだ。

――ひ～。魔王。魔王がいる。凍る。目を合わせたら凍る。

咄嗟に視線を外し、小声で答えた。

「え～。うん。必要かな。」

ぴきぴきぴき。また一段と体感温度が下がる。澤の機嫌も急降下なのが分かった。その険悪な空気に山口は腰が砕けそうになった。

「綾乃主任。」

直美は続けて綾乃を呼んだ。

彼女は待ってましたとばかりに、満面の笑みを浮かべ小走りにやって来た。

「はいは～い。牧野ちゃん呼んだぁ？」

山口の背後からからひょこりと顔を出した綾乃は、周りの空気なぞ何処吹く風と、ニタニタと緩む顔を隠しもしない。

「これ、受理できますか？」

綾乃はチラリと書類に目を落とし、人の悪い笑顔を浮かべた。

「あぁ、うふふふ。残念ね～澤君。これは、受理出来ないわぁ。」

苦しい沈黙の中、時間だけが過ぎていく。皆本当に忙しいはずなのに誰もが何も出来ずにいた。

「判さえあれば、受け取るんだな」

低く、唸るような声が室内に響く。澤のこめかみに怒筋が浮かんでいた。

「はい。受理し、適切に処理させていただきます。」

直美は丁寧に書類を差し戻し、ぴっちり４５度の最敬礼をした。

「また、お越し下さい。」

その姿は、早く出て行けと言わんばかりの態度に見えた。

澤は無言のまま書類を掴み部屋を出て行った。

「ははは。澤君、ご立腹〜」

綾乃の気の抜けた言葉に、経理課の空気は、一気に緩んだ。

「ま、牧野さん。心臓に悪い。僕、凍るかと思った。」

ほら。今も膝が笑ってる、呼吸も苦しい。と胸を押さえながら、山口もぼやく。言葉には全く力が無く、今にも崩れそうだ。

「だって、受け取れませんもん。」

直美が口をとがらすと、

「山口の教育の賜(たまもの)だねぇ〜。綾乃さんは、そんな部下を持ってうれしいよ。」

「嫌みですね。主任、嫌みでしょ。」

綾乃は、ばっしばし山口の背を叩きながら上機嫌にしている。

次々出てくる軽口に、一同も言いたい事を言い始めた。

「あれは、怖かったね〜。」

「ほら。俺、鳥肌立ちっぱなし。」

「あんな目で見られたら、言う事聞いちゃいますよ。普通。」

「火花散ってたもんな。」

「でもさぁ、澤主任のファンなら、堪らないんだろうな。」

「あ、なんか変態っぽい。」

「違うだろ。澤主任のファンは、あの氷点下の眼差しも、あたしを熱っぽく見てるぅ〜。とか、きゃーステキ〜。とかに見えてんじゃないの？」

「しかし、牧野さん。ちっちゃいのによく頑張ったね。」

「ちっちゃいとは、余計なお世話です。」

耳まで真っ赤にして、ぷんかぷんか怒っている直美に、皆、生暖かい視線を送っている。和んだ空気に、各々が仕事をしようと動き出したその時、一同はピタリと口を噤んだ。そして、一点を凝視し、みるみる顔が青ざめていく。

――あれ？何？

怪訝に思って彼らの視線の先を辿ると、直美もぴたっと固まった。先ほどより、さらに低い冷気をまとって、澤主任がご光臨されたのだ。

ゆらりと音も立てずに部屋に滑り込み、つつつ～と音がしそうな所作で書類を突き出す。

「確認してもらいたい。」

その声は、低く低く地底を這っているような響きを持って、一同を再び恐怖に陥れた。

直美は、驚きに目を見開いていたが、はっと我に返りゆっくり書類を手に取った。隅々まで確認すると、澤を見上げ、出来うる限りの笑顔を作り軽く頭を下げた。

「受理致します。適切に処理をさせて頂きます。お疲れ様でした。」

カウンター席につき、軽く息をつく。据付のパソコンを操作し、直美は必要事項を入力し始めたが、消えない気配に再び視線を上げた。

「あの…まだ何か？」

目の前の澤を不思議な面持ちで見つめていると、その口元が片方だけすっと上がった。

――あっ。

その気配に、直美は硬直した。

「牧野直美」

いまだ冷気を纏ったまま、澤が口を開いた。

彼は、直美首からぶら下げてあったネームプレートをひょいっと掴み、親指で名前をなぞった。

「どこかで見たと思った。思い出せなかったが…君か。」

直美の脳裏に、あの夜がよみがえる。

「こんな名前だったんだな。」

直美を一瞥した目はあの日と同じ、ひどく蔑んだ眼差しだった。

「あぁ。なんで思い出さなかったかな？こんなに特徴があったのに。」

トゲを含んだ言葉。また澤は、直美を傷つけようとしている。

ニヤリと嗤って手を離す。手から滑り落ちたプレートは、直美の胸にすとんと納まった。

「よろしく。頼んだよ。」

まとわりつくような視線を直美に絡ませ、言葉に含みを持たせたまま澤は出ていった。

「怖い～。」
「怖ぇ～よ。」

はぁ～。っと一斉に漏れるため息。あまりの緊張感に一同は呼吸をするのを忘れていたようだった。やっと息を吹き返した彼らは、疲労感を漂わせそれぞれ仕事へ戻っていった。

「しっかし、最後の何？えっと、牧野さん、澤主任と何かあったの？」

心配そうに顔をのぞき込んだ山口はごくんと息を飲んだ。直美の顔からは何も感情が伺えない。ただ、目だけが据わっている。

――――触らぬ神を祟っちゃいけない。あぁ、牧野さんも怖い～

足音を立てず、一歩一歩後ずさり、ゆっくり直美から距離をとる。そして見なかったふりをして、山口も仕事へ戻っていった。

――何よ、あの態度！！

一人別席に残った直美は、頭に血が上っていた。澤はイブの夜直美が告白し、こっぴどく振られた相手。誰がつけたのか、『氷の貴公子』なんてあだ名を持つ彼は、そのあだ名の通り氷のような男だった。相手を目線で凍らし、片っ端からばっさばっさと斬り捨てる。

――何よ、何よ、何よ、あの態度！！ひょっとして、あたし振られた腹いせをしてるとでも思われてる？ムキーっ！

掴んだ書類に力が入る。握った先からどんどん皺が寄っていった。

「信じられない。」

――仕事は仕事。プライベートの恨みなんかぶつけないわよ。失礼ね。…うん。たぶんぶつけてない。…と思う。

深呼吸を何回か繰り返し、預かった書類の処理を再開した。

こんな事に気を取られ続けるわけにはいかない。仕事はいくらでもあるのだ。

何度も読み返し、何度も照らし合わせチェックする。こういうケチのついた案件は、必ずと言っていいほど後々もトラブルを引き起こす。負の連鎖を断ち切るべく、何度も確認し慎重に処理をする。バックアップをとり息をついたところで、書類の端っこに赤ペンで×印を付けた。そしてもう一度目を通す。

ふと、担当者が目に止まった。見覚えがある気がしてもう一度確認する。

《担当：吉田弘司（よしだ　ひろし）》

――ヨッシー。お前か！！すべての原因はお前か！

直美は同期の失態に、わなないた。
震える手で書類を握りしめ、鬼の形相で呟く。

「許すまじ！ヨッシー」

牧野ご乱心事件。

Ｍｉｓｆｏｒｔｕｎｅｓ　ｎｅｖｅｒ　ｃｏｍｅ　ｓｉｎｇｌｅ…

（二度あることは三度ある）

Ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｆｉｇｈｔ　…？（次の戦いへ）

03. ◆ vs. 冷徹魔神？（後書き）

【裏】・好きになんてならない！

「八木沢！ふざけたメールで俺を呼び出すのはやめろ！」
「え～。ふざけてないよ、澤。『♪言～ってやろ、言ってやろ。牧野ちゃん苛めたって言ってやろ♪』って書いてあったろ。」
「…やめろ。」
「綾乃さんから、喜々として内線かかってきたよ。あの澤君がやりこめられてた。って。」
「…」
「で、かわいい“牧野ちゃん”を必要以上に苛めたんだって？何やってんの？お前。」
「…俺のミスじゃない。」
「部下（吉田）のミスは、上司（澤）のミス。諦めろ。」
「…」
「あっ、逃げた。」

０４．　◆　ｖｓ．　お姉様…方？（前書き）

いらっしゃいませ。
ご訪問、ありがとうございます。
楽しんで頂けるとうれしいです！

０４．　◆　ｖｓ．　お姉様…方？

――こんなにベタな展開になるなんて…

直美は現実を受け入れられず、ただ呆然としていた。

直美が声をかけられたのは、お昼休みに入った頃だった。

社員食堂に向かおうと廊下を歩いていると、

「ちょっと、よろしいかしら。」

甘ったるい香水を漂わせ、誰もがオー。ゴージャス！と思わず言ってしまいそうなセクスィーダイナマイツなお姉様が直美の前に立ちふさがった。

秘書室の室長補佐、宮園蘭菊（みやぞの　らんぎく）だった。

「牧野さん、でしたかしら。少々お時間頂けて？」

普段接点のない蘭菊の問いかけに、嫌な予感が脳裏をかすめた。

「ご、ご、ご、ご遠慮します。」

１歩２歩と後ずさりしたその時、直美の両腕ががしっと捕まれた。

いつの間にか両脇を固められビックリしていると、蘭菊の背後から秘書室のお姉様方がわらわら出てきた。
直美は、あっという間に囲まれて、あっさり捕獲されてしまった。

「さぁ、まいりましょう。」

蘭菊は無邪気に微笑むと、踵をかえした。

「す、すいませ～ん。これから私ランチなんですケド。」

直美の言葉は、誰にも聞かれる事なく、空しくエレベーターに消えていった。

直美が、捕らわれた宇宙人よろしく連れてこられたのは、７Ｆのミーティングフロアのトイレだった。このトイレは、別名“指導室”と呼ばれている場所で、女子社員の先輩が、女子社員の後輩を吊し上げ…もとい、“指導”するのに使われる事が多かった。何故なら、このフロアには、大小様々な会議室が設けられているため、防音設備もバッチリで音が漏れる事がない。かつ、何故かトイレにも防音設備が施されているため、他のフロアのトイレや給湯室などとは違って“指導”するには、うってつけなのだった。

早速、女子トイレの奥に追いやられた直美は、途方に暮れていた。
正面には、宮園蘭菊。その背後、パウダールームと廊下には見張りの取り巻きが控えている。
すばしっこさに自信のある直美でさえ、このデフェンスラインを突

破するのは、困難と判断した。

――あぁ、今すぐ帰りたい。

落ちる沈黙が痛い。耐えかねて、直美は恐る恐る聞いてみた。

「え～っと、ワタクシニ、ナニカ、ゴヨウデショウカ？」

緊張で、びっくりするほど棒読みになってしまったが、構っていられなかった。本当に嫌な予感しかしない。

直美の正面に立つ蘭菊は、モデル立ちをし、とても優雅な所作で右手の人差し指を口元に当てた。しかし、その視線は上から下へ。下から上へ舐め回すように移り、やがてフッと嘲笑った。

「あら、それすらもお判りでないの？大した方ね。」

それは、明らかに見下した態度だった。

いつの間にか目が据わってしまった蘭菊は、先ほどまで纏っていたゴージャスな雰囲気とはうって変わり、今は禍々しいオーラを放っている。呪われそうだ。

「えっと、スイマセン。身に覚えがゴザイマセン。」

「はっ。本当に図々しいのね。営業2課の澤主任の事よ！あぁ、それとも、お子こちゃまなあなたは、もう忘れたんでちゅか？ねぇ、オチビさん。」

直美は思わずため息をついた。

――澤主任…あいつか！やっぱあいつが原因かぁ！！

やっぱり澤主任が原因だった。直美はがっくりと項垂れた。宮園蘭菊という人は、社内では何かと有名な人だったので、呼び出された理由には、なんとな〜く心当たりがあったのだ。違ってくれ。と一縷の望みをかけてもいたのだが…。

――それにしても、早っ！ていうか、早っ！

澤と直美がにらみ合ったのは、まだ1時間ほど前。しかし、もう蘭菊の耳に入り行動を起こされるとは想像も出来なかった。そのうち、ひょっとして、何かあるか…も？とは思っていたが、それにしても早すぎる。

直美は肺の中の空気をすべてはき出した。そして、蘭菊とゆっくり視線を合わせた。

目を細め、口元だけ笑みを浮かべている蘭菊に気後れしないように、背筋を伸ばし大きく息を吸った。

「すいません。やっぱり身に覚えがありません。確かに先程、澤主任は経理課にみえましたが、業務の事でお話ししただけです。」

そう。何を言われてもこれ以上話す事は無い。逆立ちしたって何も出てこない。まぁ、1ヶ月程前に告白して振られている事はこの際関係ない。全く関係ない。直美の中の歴史書に書き殴って抹殺した黒歴史の中の黒歴史。

――澤主任の事なんて今は米粒ほども想ってないのよ。いや、それでは米粒に失礼だ。ヤツなど、チリだ。塵。

心の中で罵倒しまくり、ギュッと拳を握った。

怒りを顔に出さない様に気を付けていると、目線の先で蘭菊が揺れた。

「業務？」

発せられた言葉に皆の背筋が凍った。今まで気配を消し、成り行きを見守っていた秘書課の面々も顔色を無くしていく。
その様子に気を取られていた直美は、自分の左手を取られて初めて蘭菊が目の前まで距離を詰めている事に気づいた。

「本気で言っているの？あなた。」
「――つっ。」

つねられていた。

染み一つ無い透き通るような白い手。その先を彩る淡い桜色の爪。綺麗に整えられた指先からは、全く想像つかない行為だった。直美は、あまりの痛さに手を引っ込めようとしたが、がっちり捕まれてびくともしなかった。ぐっと歯を食いしばり、蘭菊を睨み付けると、暗く澱んだ瞳とぶつかった。その闇色は、本当に直美を映しているのだろうかと疑いたくなるほど真っ暗だった。

「あの方と口をきくだけでもおこがましいのに、口答えまでしたでしょう。あの方を愚弄して。あの方を愚弄して。あの方を愚弄して！」

――な、何？この人…おかしくない？

悲鳴に近い耳障りな声を発し、指だけはギリギリと直美の甲をひねり上げている。

直美が、痛い。離して下さい。と言えたのは最初だけで、今はただ、襲い来る痛みに耐えるのに精一杯だった。

その時、廊下に続く扉が少し開かれた。睨み合う2人は全く気づく事はなかったが、取り巻きがざわざわ騒ぎ出した。何事かこそこそ話し合うその様子からは、困惑の色が見て取れる。しばらくして、そのうちの一人がおずおずと蘭菊に声をかけてきた。

「あの、蘭様。」

「・・・・・・・・・」

蘭菊は直美を睨んだまま続きを促した。

「さ、澤主任がおみえです。」

「澤主任？」

ぱっと直美の手を離し蘭菊は振り返った。少し開かれた扉の先に、グレーのスーツがちらりとみえる。あの凛とした後ろ姿は、紛れもなく澤だ。今までとはうって変わって、スキップでもしそうな勢いで蘭菊は出口へと近寄った。

「まぁ、どうしたの？澤君。」

小鳥がさえずるような声で問いかける。トイレが、お花畑にいるような雰囲気に変わった。

「第三会議室に忘れ物をした。秘書室に内線を入れたが誰も出ない。ひょっとしたら後片づけをしているのではと、このフロアまで来たんだが…」

扉越しに澤は、ちろりと視線を流した。取り巻き達が緊張し息を飲む。澤の視線はその奥へ、真っ直ぐ直美へと向かっていった。

「お邪魔だったみたいだな。」

一瞬の冷笑の後、すぐに無表情になった澤は腕時計を指した。

「時間がない。開けてくれないか。」

「ごめんなさい。秘書室に誰もいないなんて、あるまじき事だわ。」

蘭菊は取り巻き達に秘書室へ帰るように言い、そのうちの一人に鍵を持ってくるよう指示を出した。彼女達はホッとした様子で、慌ただしく秘書室へ戻っていった。

「さぁ、こんな場所では気分も悪くなってしまうわ。鍵はすぐ届くから行きましょ。」

2人は、和やかに姿を消した。
まるでデートにでも行くように…

人口密度がなくなり、急に寒々とした空間になったそこに一人取り残された直美は、静かに閉まる扉を見つめていた。

ただ…じっと見つめていた。

「まっきのちゃーん。お菊に呼び出し食らったんだってぇ〜。」
経理課に戻ったとたんに、綾乃主任からのんきな声が飛んできた。
一同の視線が一気に集まり、直美は居たたまれなくなってしまう。
「はぁ〜、はい。“指導室”に引きずり込まれました。てか、モウゴゾンジナンデスネ。」
相変わらず情報が早い。
少し思い返してみる。いっぱいいっぱいで気づかなかったが、ひょっとしたら、捕獲されたのを見た人がいたのかもしれない。それで、昼食時の社員食堂で、一気に話が広まってしまったのかもしれない。
――うわぁ、もう社内の女子社員はみんな知ってそうだなぁ。やだなぁ。
「牧野さん。大丈夫だったの？それ。」
「……はぁ。まぁ。」
山口が心配げに、直美の顔をのぞき込んだ。とっさに左手を右手で隠し言葉を濁した直美は曖昧に微笑み返した。ちょっと引きつり気味なのはご勘弁。

「ふふふ。澤君でしょ？原因は。」

ニヤニヤしながら近づいてきた綾乃は、カウンターの上にちょこんと腰掛けた。
直美は大きく溜息をつくと、綾乃に向かい合った。

「そうです、正にそうです…。」

力無く言ったものの、直美は怒りがわいてくるのを感じていた。
あの冷徹魔神を思い出すと、自然と内側から沸々と燃えたぎってくる。いつの間にかその瞳には、もう怒りの炎が見え隠れしていた。

「澤主任です！決算で、チョー忙しいのに！やっと時間を作って出て行ったのに、お昼食べ損ねちゃいました！！」
「うふふふ。お菊は澤君狙い。入社した時から、ずっとだもんねぇ。相手にされてないんだから、いい加減諦めれば良いのに。」

綾乃はケラケラ笑っている。

「知ってる？あいつブラックリスト作ってて、澤君と関わった子達、順番に排除してんのよ。おめでとう。まっきのちゃんはこの度、黒い手帳に名を連ねました。」

社内では、“秘書課の宮園蘭菊は、澤重治に固執してる。彼に近づく者は、片っ端から消される”と真しやかにささやかれていた。社内・社外にも澤のファンは多いが、蘭菊の報復を恐れて遠巻きにしてるようだとかなんとか。それは、あくまで噂の域を出なかった話だったが、今回同期である綾乃の発言で事実と判明してしまった。
山口と、直美は不安げに顔を見合わせた。

「綾乃主任。それ、かなりマズいんじゃ。」
「うわ～迷惑！！それ、すっごい迷惑です！」

ホント、嫌よね～。相変わらず綾乃は楽しそうだが、抹殺される側は、堪ったもんじゃない。今回は、完全に澤が直美に絡んできたのだ。決して直美からのアプローチではない。

――まぁ、当然イブの出来事は除外して。お菊さんが知らない事をわざわざ伝える事もないもんね。むしろ一生知らないで欲しい。本当に消し去りたい過去なのよ。

直美は悶々としてきた。知らず眉根を寄せていると、綾乃は急に真顔になり、すっと視線を漂わせた。まるで、ここにいない誰かの姿を思い浮かべているように。

「見てくれも仕事ぶりもそこそこなもんだから、プライドがやけに高くてね。おまけに、性格歪んでるから避けられてんのよ？彼女。」
「そうですか？でもさっきは、そうでもなかったですよ？２人して腕組んで歩いていきそうな勢いでしたもん。」
「…なぁに？澤君一緒にいたの？」
「まぁ居たって言うか、なんとういか…途中で澤主任がやって来て、お菊さんと一緒に消えちゃいました。」
「へぇ～。」

結果的に助けられたようになって、何だか腑に落ちず直美が口をとがらせていると、綾乃は一瞬驚いた後、ニタニタしだした。へぇ～澤君いたの。なんて言っている。実に楽しそうだ。

「でも、秘書室の宮園蘭菊。って言えば、崇拝している男性も多いじゃないですか。」

よく聞きますよ？山口は首をひねりながら問いかけた。

「見る目が無いのよ。男どもの。」

身も蓋もない意見だったが、直美は綾乃に賛成だった。確かに先程直面した蘭菊の真の姿を見てみれば、世の男性も幻滅するだろう。

「だいたい、取り巻きに“蘭様”って呼ばせてんのよ？頭おかしいわよ。あんなのお菊で十分じゃない。」

「相変わらず、お菊さんには辛辣デスネ。」

「綾乃主任と澤主任と、…お、お菊さんは、たしか同期でしたよね？」

「そうよ。ついでに人事の八木沢とうちの旦那もね。良くも悪くも長いつきあいなのよ。ホントやんなっちゃう。」

蘭菊に『お菊』。命名したのは綾乃だった。入社早々『あんた、蘭なのか、菊なのかどっちなのよ！』と絡み、それ以来お菊と呼ぶようになったのだ。蘭菊はそれがたいそう気に入らないらしく、取り巻きには絶対に『蘭』と呼ばせている。

「まぁ、取りあえず無事で何よりね。でも、お菊は執念深いから気を付けなさ～い。」

綾乃は人差し指で直美のおでこを、つんつん突いてにこりと微笑んだ。

「今度何かあったら、ちゃんとあたしを呼ぶのよ～。」

囁かれた言葉に、直美は目を見開いた。綾乃のその笑顔と姿に、ひ

どく安心した心持ちになった。ギスギスしていた心に、温かいものが流れ込んでくる感じがする。

「姐さん。一生ついて行きます！」

「姐さん。って、牧野さん…」

胸の前で手を組み、瞳をキラキラさせている直美を、残念な子を見るように山口は呟いた。

直美が仕事に戻ろうとパソコンの電源を入れたとき、左手の甲が目に止まった。気が高ぶっていたのかさっきまで痛みは感じてなかったのに、経理課に帰ってきたとたん、ジンジン痛みだした。人より二回りも小さな手は、爪が食い込んでいたせいで、血がにじんでいる。

――酷くつねられると、青あざになるんだな。

生まれて初めて知った事実を、直美はじっと噛みしめていた。

――綾乃主任に気づかれちゃったかな？心配かけちゃったなぁ。

ふと、先程の光景が脳裏に浮かんだ。

すらりとした上背。たくましい背中。突然現れた澤のその姿を見た時は、不思議な安堵感に包まれた。

そんな気持ちになったこと事態、直美には信じられなかったのだが、

その直後に見た冷たい眼差しに体が凍ったように動けなくなった。

――あきれてたのね、きっと。あんなトコに呼び出されて、涙目で、ボロボロで…

あまりにも情けない姿にきっとかける言葉もなかったのだろう。一瞬そう思ったが、考えを改めた。そもそも、澤は直美など相手にしていない。興味も無い相手にかける言葉など無いはずだ。

――まぁ、澤主任の事は置いといて、あの場で床に転がされたり、水ぶっかけられたりするよりは、随分マシだったわよ。そうよ、ラッキーだったと考えよう！

とにかく今は仕事をしなければ。直美は頬を軽く叩いた。決算で2月いっぱいは残業だ。課の者は全員、連日終電近くにしか帰れない。

――くよくよ考えるな。目の前の仕事をやり抜こう。

…時折、消えていった2人の姿が脳裏をよぎると、胸にチリチリした痛みが走る。

しかし、それに気づかないふりをして、直美はキーボードをひたすら打ち続けた。

Ｍｉｓｆｏｒｔｕｎｅｓ　ｎｅｖｅｒ　ｃｏｍｅ　ｓｉｎｇｌｅ…

（泣きっ面に蜂）

Ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｆｉｇｈｔ　…？（次の戦いへ）

０４．　◆　ｖｓ．　お姉様…方？（後書き）

【裏】好きになんてならない！

直美と、山口と…

「お菊さんて、ずっとドロンジョ様みたいだと思ってたのよね。」

「…」

「でも違ったわね。彼女は今日から“メデューサ”ね。」

「…」

「それに比べて綾乃主任は格好いいわ！“極妻”思い出しちゃった。“極妻”」

「…」

「うん。姐さん。ぴったり！」

「牧野さん。お願いだから、心の声を表に出さないで…。」

０５．　◆　同期会（前書き）

更新遅くなってすいませんでした。
風邪ひいてました。（Ｔ＿Ｔ）
喘息持ちのわたくしは、咳が全く治まらず非常に難儀しております。
皆様、体調には十分ご注意くださいませ。ませ。

05.　◆　同期会

「ちょっと！あんたのせいで酷い目にあったじゃないのさ。ヨッシー！」
「申し訳ありませんでした！」

直美は仁王立ちし、心の底からわき上がる怒りを目の前の男にぶつけた。
現在進行形で、彼女に土下座をして謝っている男は、営業２課・吉田　弘司（よしだ　ひろし）澤とトラブルになった原因を作った張本人、諸悪の根元。直美にとっては最低最悪、悪魔のような男だ。

今夜は同期会だった。直美達、０９年入社組はとても仲が良く、入社してからずっと月１回のペースで、会社近くの居酒屋“かぁちゃん”で飲み会を開いている。
今日も今日とて、出張・出向・赴任組を除き、ほぼ全員が揃っていた。

残業で遅れてきた直美は、鼻息も荒く、参加早々吉田を捕まえた。
今日は、どうがどうでも直接説教してやろうと、同期の心配メールをことごとく無視し、今まで怒りをためていたのだ。

「マッキー、許してくれよぉ～」
「もう！ちゃんと仕事しなよ～。てか、離・れ・ろ！」

情けない声を上げながら、縋り付いて謝ってきた吉田は、しかし次の瞬間、直美の肩をがしりと組んで来た。生のジョッキ片手にアルコールの匂いのプンプンさせて近づけてくる顔を、迷惑とばかりに、手でぐいぐい押し返す。

こう見えて吉田は、同期の中でも1・2を争うほど出来る男だった。我がで社トップを誇る澤の直属の部下となっており、マンツーマンで指導を受けている。その事実は、会社側の期待度が高い証拠だと言えた。
…にも関わらずこの男、とぼけた書類を回したり、遅れて提出したりと、たまにおかしな事をする。『書類作成は、苦手なんだよ』とこぼす吉田を『仕方がないな…』と影ながらフォローしていた直美だったが、立て続けに酷い目にあってしまった今日は一言言ってやらないと気が済まなかった。

「待ってたんだよ、マッキー。お前、すんげー噂になってんぞ！」
「そうそう。女共がうるさかった。」
「マッキー、真相を聞かせてくれ！お前の武勇伝を俺たちに～！！」
「うっさい！田中1号、2号、3号！！」

次々に言いたい事を言い出した、営業部の田中　利一（たなか　としかず）田中　勝次（たなか　かつじ）田中　裕三（たなか　ゆうぞう）にそれぞれビシッビシッと指を指しながら、直美は憤怒の表情でつっこんだ。
ちなみに田中1号、2号、3号とは、『田中がいっぱいでわかんない！』と、直美が付けた失礼なあだ名だ。

「牧野、心配してたんだ。…吉田、お前反省しろよ！」

直美をいたわりつつ、ドスの効いた声で吉田を窘めたのは、企画1課の佐々木　修（ささき　しゅう）だった。彼は直美と同じ年の妹がいるらしく、直美をいつも可愛がってくれた。少しシスコン気味だが、彼女にとっても頼れるお兄さんみたいな存在だった。

ここに座りなよ。と佐々木に呼ばれた直美は、彼の隣にストンと収まる。
すっかり膨れてそっぽを向いていた彼女だったが、背中を落ち着くようにトントンと叩かれ、取り分けてくれた料理を渡され、甲斐甲斐しく世話を焼かれているうちに、少し笑顔が戻ってきた。

「でもマッキー。秘書室の蘭菊さんに呼び出されたんでしょ？」
「そうそう。見た子がいて、社食で大騒ぎしてた。」
「ははは…やっぱ見られてたんだ。」

枝豆をほおばりながら心配していたのは、日野　美咲（ひの　みさき）と橘　由香（たちばな　ゆか）だ。本社勤務の同期は４０人程いるが、女性は直美を含めてたった３人だけだった為、とっても仲が良かった。

「…指導室つれてかれたぁ」
「「マジ！？」」
「噂は本当か…」
「本日、身をもって知りました。」

昼間の惨劇を思い出し、直美が遠い目をしていると、１号が割り込んできた。２号・３号も後に続き、女子組を取り囲むように座り、話に加わった。

「噂って？」

美咲と由香は、やれやれとでも言うように首を振り、溜息混じりに答えた。

「男共は知らないのね～。」

「あれよ、あれ。“澤重治近づく者は、片っ端から消される”ってやつ」
「は？消されるってなんだよ。」
「秘書室の宮園蘭菊。澤主任にご執心なのは知ってるでしょ？」
「２人並ぶと、神々しいよな。」
「美男美女だもんな。」
「あんた達の目も節穴ね。」

美咲と由香は、呆れた目で男共をみやり『目、腐ってるわね。』『でもまぁ、見た目だけならね。』と囁き合う。

「でね、蘭菊さんは澤主任に悪い虫がつかないように、監視してるのよ。」
「そうそう。影で片っ端から抹殺してるって。」
「「「恐ぇ～な～」」」
「それでもって、今日、マッキーは目を付けられちゃったのよ。」

女子組のその言葉に、男性陣は視線を合わせた。何だかもやもやしてくるのを、ぐっと押さえ不安を口にする。

「おいおい、マズいんじゃね～か？マッキー」

一同が心配げに直美をのぞき込んだ。直美は大丈夫。と言いたかったが、言葉が喉に貼り付いてなかなか出てこない。昼間の出来事は、直美自身に少なからず衝撃を与えているようで、結局曖昧に微笑むだけしか出来なかった。
そんな直美を見て、一同は益々心配になってきた。みんなが、かける言葉を懸命に探していると、ふらふら吉田がやってきた。

「ぎゃはははは。面目ねー。すまん、マッキー成仏してくれ！」

空気も読めず、へらへら笑う吉田に一同がキレた。直美への心配が、吉田への怒りに一括変換されてしまったのだ。

「原因はお前じゃね～か！」

「どうすんだよ！てか、お前ちったー反省しろよ！」

「そうだぞ！てめぇのおかげで、今日の営業部、凍死者続出だったじゃねーか！」

「みんな澤主任の怒気にやられて仕事にならなかったんだよ！」

「ふざけてんじゃねーよ！」

田中1号、2号、3号は、次々に吉田を転がし足蹴にした。

営業部のあるフロアーは、どうも昼間の騒動の余波で、死屍累々だったようだ。

――確かに、あの状態の澤主任がそのまま営業部に戻ったりしたら……　恐っ！

直美の背筋に、ぞくりと悪寒が走る。

澤は、今日一日中機嫌が悪かったのだろうか？想像しただけで倒れてしまいそうだ。短時間でも逃げ出したくなったのに、一日中では、命が削られる。

「俺だって、酷い目にあったんだぞ。」

ちょっとふてくされて言う吉田に、直美の鉄拳が振り下ろされた。

「自業自得でしょ！こちとら、決算でてんてこ舞いなのに、やっかいなヤツ持ち込んで！いらないにらみ合いしちゃったじゃない。すっごく恐かったんだから～。」

うわ～ん。と大げさに泣き真似をすると、佐々木がすかさず、直美の肩を抱き、頭を撫でた。
彼はニコニコしながら、直美の小芝居に付き合っていた。『迷惑をかけられた』と言う事をしっかり主張したかった彼女の意図を正確に読み取っていたからだ。反して、吉田に送る視線は殊更(ことさら)冷たい。それは、澤とタメを張れる程だった。

「ホント、悪かったって。…あの時主任、般若の顔して戻ってきて、部長脅して出て行った。帰ってきても機嫌が悪いし、フロアなんて、一気に北極圏になった感じだし…ずっと睨まれて、みんなにも睨まれて、視線が痛いのなんのって…。」

指をもじもじ絡ませながら呟いて、吉田がしょんぼり項垂れる。ちろちろ直美を見ながら話す語尾もどんどん弱々しくなっていった。

「だからお前は、自業自得だろ！」
「てか、俺達とんだ、とばっちりじゃねーか。」

一同の怒りの矛先が再び吉田に向かいかけたその時、冷静な声が響いた。

「そんな事より、牧野を守る対策を取らないとだめだ。秘書室の連中に目を付けられたんだろ？澤主任のファンは彼女等だけじゃない。」

佐々木の言葉に一同はハッとした。そうだ。これは由々しき事態だ。これは０９年入社組始まって以来の危機だ。とたんに一同はオロオロし始めた。

「どうすんだよぉ。マッキーなんか、すぐやられちまうじゃないか。」
「…マッキー、今から護身術習っとくか？ん？」
「これはまずいぞ。皆の衆。マッキー安全保障委員会を立ち上げる。よし。作戦会議だ！」
「すいませ～ん。生中５つと熱燗３つ持ってきて～」

さりげなく店員に追加注文をして、田中１号、２号、３号は、吉田の襟首を掴み、ずるずる引きずって同期の別の輪に戻っていった。緊張感が有るんだが無いんだか分からないが…、きっと無いのだろう。新しいネタを魚に、これから騒ぐ気満々だ。
女子組はそれを冷めた目で見ていたが、佐々木は直美の手を両手でそっと包み込み、優しく微笑んだ。

「牧野。大丈夫だよ。俺を頼っておいで。」
「へっ？」

突然の甘い言葉に、直美の胸はキュンと締め付けられた。一瞬狼狽え見つめ返していると微笑んだままの佐々木が囁く。

「俺を頼ればいい。全力で牧野を守るよ。」

その言葉に、直美はさっきの小芝居の続きだと気づき、目をキラキラさせて大げさに頷く。

「うん、修ちゃん。ありがとう。私の事守ってね。」
「…当たり前だろう。」
「「あらあらあら。」」

手を握り合い、キラキラした目で見つめ合い、ニコニコ微笑んでい

る2人の姿をみて、女子組の美咲と由香はニヤニヤして生温〜い目で2人を眺めた。

「お邪魔かしらね。」

「ホントね。ここは、若いお二人で。」

「ち、ちょっと待って！」

世話焼きおばばのような言い回しで、席を立とうとした2人を、直美は慌てて引き留めた。美咲と由香はケラケラ笑い始め、あんた、何焦ってんのよ〜。と涙目になってテーブルをバンバン叩きだす。彼女等は焦る直美が随分お気に召したらしい。

佐々木の方も、そんな女子組を見てニッコリ笑っている。

しばし呆然とその様子を見ていた直美は、先程の小芝居に2人が悪のりしていただけだと気がづいた。そして、気が付いた途端、自分だけからかわれている様な気になって、なんだか、おもしろくなくなってきた。

こっそり溜息をついていると、やがて笑いを収めた女子組がずいっと身を乗り出し顔を近づけてきた。

「けどね、マッキー。老婆心から言わせてもらえば…」

「うん？」

「ホントに気を付けた方が良いわよ。」

女子組の突然うって変わった真剣な眼差しに、耳元で低く囁かれるその言葉に、直美はごくんと息を飲み込んだ。

「よし、皆の衆！解散！！」

田中１号の号令で、同期会はお開きになった。終電にはまだ時間があるため、各々最寄りの交通機関へと散っていく。そんな中、直美だけ立ち往生していた。

「ちょっと、ホントに？」

直美の肩には、がっつり寄りかかった吉田がいた。不評を買ってかなり飲まされたらしく、足取りがおぼつかなくなっている。
同じ方向へ帰るのは、直美と吉田しかいない為、自然と吉田の担当は直美になってしまった。
こんな時こそ佐々木の出番なのだが、またこんな時に限ってトラブルが発生し、会社から呼び出しをくらって、同期会を抜けていってしまった。

「ホント無理〜！！」

ぴょんぴょん跳ねながら直美は叫んだが、同期の面々は彼女を無視して、にこやかに散っていってしまった。
完全に見捨てられてしまった直美は、ここから一人で、駅までの道のりを、酔っぱらった吉田を引きずって行かなければならなくなってしまった。もう、溜息しか出てこない。

———何がマッキー安全保障委員会よ！何の安全も守られてないじゃない。酔っぱらい押しつけただけじゃない。

直美は一人、地団駄を踏んで鬱憤を発散させた。吉田は、正気を保っているかも怪しい状態になっている。ぐずれそうな体を必死に支え、彼の頬をぺちぺち叩いた。すると目をしょぼしょぼさせながら、周囲を確認し、やがて直美と視線を合わせてきた。

「う～、マッキー。ごめんよ～。」

「うっさい。もう、家に帰るよ。ちゃんと歩いて。あたしが押しつぶされる！」

弱々しいが返事が出来るのを確認し、直美は歩き出した。

普通に歩いて15分ほどの道のりを、吉田に乗っかかれながら、ふらふら歩く。時折眠ってしましそうな吉田を励ましつつ、殴りつつ、色々あった今日をぼんやり振り返っていた。

――はぁ、今日は疲れたな。

直美はクリスマスイヴの夜以来、初めてきちんと澤と顔を合わせた。彼の前でちゃんと普通の態度が取れるのか。それだけか気がかりで、最大の心配事だったのたが、…何だかおかしなことになってしまった。

――この道で、彼を見つけて、この道で告白したんだ。

駅へと続く道は、あの日、澤に告白した道だった。

あの日と違いイルミネーションの無くなった木々は、ただ、そこに静かに佇んでいて、寒々とした空気にひどく馴染んでいた。

見上げても星はなく、ネオンを写したグレーの空が、より一層気持

ちを空しくさせた。

――名前も覚えられてなかったのね。

知らずため息が漏れる。ネームプレートを手に取られ名を確認された時、再び心が凍る思いがした。蘭菊に抓(つね)られている姿を見られた時もそうだった。

もう見る事はないと思っていた嘲りを含んだ視線。

――なんであんな人に惚れちゃったんだろ？……今は、全然想ってないけどね！！！

誰に宣言するでなく、一人噛みしめる。

――彼の中でのあたしの評価は、きっと“身の程知らずな奴”ね。今日でレベルが2つ3つ上がった気がする。きっと澤主任は、私の事大嫌いになったに違いない。あたしも、嫌いになったもの。お互い様よ。ちょうど良い。

ようやく着いた駅のベンチに吉田と2人で腰掛けた。30？近く身長差のある彼を支えてきたため若干息が切れていた直美は、ゆっくり息を整えながら、高速で通り過ぎる電車をぼんやり見つめていた。巻き起こる風は彼女を容赦なく襲い、頬や首筋から体温を奪っていく。

――このまま心のもやもやも、飛んで行かないかな。

また、溜息が洩れた時、急に肩の重みが無くなった。直美が顔を上げると吉田がこちらを真剣な眼差し見つめている。彼はしばし従順していたが、やがて静かに口を開いた。

「なぁ、マッキー。まだ怒ってる？」

「えっ？」

「だって、口尖ってる。眉間に皺も…」

吉田は人差し指で、直美の眉間を押した。痛くはなかったが、ぐりぐりされて、何だか遊ばれているようで納得がいかないものの、先程より顔色も良く、しっかり話している吉田を見て、直美は少しほっとした。この様子だと、駅から自宅まで自力で帰れるだろう。安心してニコリと微笑み、水かスポーツドリンクでも買ってこようと腰を上げかけた時、ぎゅっと腕を捕まれた。

「…お前、可愛いな。」

「はっ？」

聞き慣れない言葉に、直美は何度か頭でセリフを繰り返す。

――可愛い。可愛い。…か～わ～い～い～？

理解した途端、頬が熱くなるのを感じた。また、冗談を！言いかけて慌てて口を噤(つぐ)む。目の前にある吉田の真剣な眼差しで、直美は動けなくなってしまった。

「なぁ、マッキー」

ゆるりと右手を握られた。

「許してくれるなら…」

頬を滑る彼の右手が直美の顎を捕らえる。

「今年バレンタインのチョコ、俺にくれない？」

「え…」

「2週間後、チョコ、俺に、ちょうだい…」

直後に柔らかい感触、鼻腔をくすぐるシトラスの香り、視界が真っ黒になった時、

直美は初めてキスされている事に気が付いた。

They were all the first experience.（それらは全部初めての経験でした）

The next fight …？（次の戦いへ）

０５．　◆　同期会（後書き）

【裏】好きになんてならない！

自宅にて

どうしよう…。
牧野直美２２才にして初キッス！
ゴロゴロ～ゴロゴロ～　↑転がる音
何？初キッスって。古！普通にファーストキスとかでいいじゃない！
ゴロゴロ～ゴロゴロ～パスパスパス　↑転がる音＋悶えてクッションを殴る音
ぐはっ、初めてのキッスとか、初めてのキッスとか、初めてのキッスとか考えてるあたしイヤ～～。

ゴロゴロ～ゴロゴロ～ゴロ……
「ＮＯ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！」
「ナオ。うるさい！！！！」

【　裏　】　同期会　～トトカルチョ～（前書き）

田中1号視点です♪
【裏】の話なので、少し早めにアップします。
よろしくお願いいたします。

【 裏 】　同期会　～トトカルチョ～

「お～い。トトカルチョやるぞぉ」
「「トトカルチョ？」」

俺、田中1号の囁きに、2号・3号はすぐさま反応した。
俺たちは顔を見合わせ、アルコール片手にこそこそ壁際の席に移動して行く。
仲間の輪から外れ、腰を落ち着けて顔を突き合わせ、ヒソヒソ密談を始めた。

「「何の？」」
「聞いて驚け！題して“マッキーの恋人を探せ”」
「「“マッキーの恋人を探せ”？」」

ビシッと親指を立てる俺に、2号・3号は訝しげに顔を見合わせていた。

「そう。澤主任や蘭菊さんの介入で、マッキーを取り巻く環境が変わりそうだ。」
「「…」」
「マッキーを手中に収めようと本腰入れてくる奴がいると、俺は睨んでる。」
「「…」」
「信用してね～な？でも、ぜって～変わるぞ。」

俺は自信満々ににやりと笑う。こういう時の俺の勘は絶対だ。百発百中、間違いがない。
それを十分承知してるんだろう。2号と3号はごくりと息を飲んだ。

今日の同期会は大変波乱に満ちていた。
昼間吉田がポカをやったせいで、牧野は澤主任と小競り合いをしたらしい。それを不服とし、秘書室の蘭菊さんが出張(でば)ってきて、一方的に絡まれたらしい。
澤主任のただならぬオーラと、耳に入ってくる詳細と噂。俺たち同期の面々は牧野が心配になり、仕事の合間をぬいつつ上司の目を盗みつつ、こっそりメールを送るも、彼女からは一切返答がなかった。そして先程、本人から語られる事実に、また少なからず動揺した。
そのため、今までこっそり活動していた“マッキー安全保障委員会”をおおっぴらに宣言し、対策を練ることにした。暗躍をモットーにしていたんだがな。この組織は。
しかし、そうとばかりも言ってられない。
牧野がトイレに立った時、佐々木が耳打ちしてきた。彼女が左手を怪我してるという事、どうやらそれは、蘭菊さんの仕業だという事。何てこった。そりゃ犯罪じゃねーか。立派な傷害罪だぞ！怒りを覚えつつも、佐々木を見ると奴も青筋を浮かべており、俺と同じように憤りを感じていた。
こりゃ、もう一つ策を講じとくべきだな。
“マッキー安全保障委員会”の正念場だ。

一通り段取りを付けた後、俺は2号と3号を呼んだ。
“マッキーの恋人を探せ”と銘打って、はじき出される男達を吟味しつつ、その他もろもろを警戒しつつ、めぼしいところをピックアップするのが目的だ。
そう。これがもう一つの策。牧野に騎士(ナイト)を付ける事。

「で、まずは、馬（おとこ）だな。」

俺は店の紙ナプキン抜き取ると、内ポケットからボールペンを取り出した。
カチッと小気味よい音を立て芯を出すと、さらさらりと書き込む。

「まず、ヨッシー。アンド佐々木っと。」
「「ヨッシーと佐々木？」」

2号と3号は胡乱気（うろんげ）に見つめ合い、やがてふるふる首を振った。

「ヨッシーは無いだろう。あいつマッキーの事、悪友扱いしてるじゃん。」
「佐々木もだろ？奴はただのシスコンだぞ？まるっきり妹扱いじゃね～か。」
「だから言ってるだろ？本腰入れてくる奴が出て来んだよ。こ・れ・か・ら。」

チッチッチ。俺はこれ見よがしに人差し指を振り2人の言葉を否定する。
“牧野に騎士（ナイト）を付ける事。”もちろんそれは正当な表向きな理由で、『他人の恋愛話って楽しいよね～』ってのは裏向きな俺の本音。さらに、牧野の相手が身近な人間ならなおのこと良しだ。
にやりと笑った俺の瞳の奥は、悪戯心満載で、新しいオモチャを手に入れたかのようにキラキラ輝いているだろう。だって、楽しくてしょうがない。
そんな俺を見て2号・3号は再び顔を見合わせた。

「まぁ、一番仲は良いよな。」
「マッキーも懐いてるしな。」

さぁ、どんどんピックアップしてくれ。俺は両手を広げ、鷹揚に頷く。

2号・3号は思案顔だ。

「マッキーの恋人…そういやぁ、マッキー自体悪い噂聞かないんだよな。」

「あぁ、好感度抜群なんだよな。」

「マッキーかわいい。ってちらほら聞くよな。」

「目立つんだよ。何か色んな意味で。」

まぁ、本人は気づいていないようだが、周りの男性は、意外とマッキーを高評価している。

かわいらしい容姿に強気な態度が、なんとも微笑ましいとか。なんとか。はやりのツンデレか？しかも、一癖も二癖もある同期の面々を片手で転がしている様も、ポイントが高いらしい。俺たちにとっちゃあ、失礼な評価だが、まぁ、事実だな。牧野は俺たち同期の重要な緩和剤だ。

さりとて、好感度が抜群に良くても、それが恋愛に発展するのかどうかは、微妙な話であって…、

「そういやぁ、あいつは？」

2号はボソリと呟く。

「「あいつ？」」

「システム1課の伊藤さん。マッキーに熱い視線送ってたぞ。」

システム1課の伊藤さんとは“さわやか”を絵に描いたような人だ。仕事も出来、やさしいとも評判で女子社員の評価も高い。女子トー

クでは必ず名前の挙がる男だ。
2号のドヤ顔に頷きかけた3号だったが俺は真っ向否定した。

「あいつはダメだ！」
「「ダメ？」」
「あいつ、完璧に隠してたが、同じシステムの内田さんと総務の河野さん二股かけて修羅場ってる。」
「「二股！？」」
「おまけに完全にもみ消したが、同じシステムのお局、境田さんに迫られてヤッて妊娠騒ぎを起こしている。」
「「…妊娠」」
「あの野郎はダメだ。優しいんじゃない。優柔不断なんだ。」
「「…」」
「…まとわりつくのは恐い女ばっかりだからな、マッキーなら、自分の言う事聞くとでも思ったんだろう？手を出そうとしてたから、俺が潰した。」
「「…！！」」

2号と3号はお互い眉間に皺を寄せて難しい顔をした。

「「最悪だ」」

そう。俺が潰した。奴の思惑を。
牧野は我慢強いから、今回の事だって我慢して笑ってる。でもその姿は痛々しい。
変な男に捕まったりしたら、それこそずっと我慢しちまう。自分から別れも言い出せず男の良いようにされちまう。それじゃあダメだ。俺たち同期は絶対許せね～。牧野は俺たちにとって本当に大切な仲間だからな。
沈黙の後、しばらく思案していた3号が言った。

「企画の藤本さんと大塚さんはどうだ。マッキー見て惚けてたの見た事あんぞ。」

藤本さんと大塚さんか…彼らは企画3課のツートップ。知的めがね～ズのイケメンだ。2人の繰り出す戦略は追従を許さない。うん。良いんじゃないか？なかなか。

「却下！」

2号は宣誓するように手を挙げた。

「知らないのか？あいつ等二次元キャラしか愛せない奴等だぞ。」

「「！！！」」

「休日は毎週二人して秋葉に通い、何とかって言ってたな…魔法使いをこよなく愛してるんだよ。」

「「マジ？？」」

「奴らが頬染めてたのは、その魔法使いの少女にマッキーが似てたからだ。」

「「…」」

「奴らはマッキーにその魔法使いキャラのコスプレをさせようとしていた。オーダーメードで服を発注してたから、俺が潰した。」

「「！！！」」

「もっとも、俺が知ったのも偶然だったんだがな。」

「「…2号。Ｇｏｏｄ　ｊｏｂ！！」」

俺と3号は思わず親指を突き出した。

「あいつら、マッキーに魔法の呪文を言わせようとしてたぞ。何だか怪しげな計画練ってたから全部消してやった。全く油断も隙もな

い。」

2号は、当時を思い出したのか憤慨していた。ぶつぶつと呪詛を吐いている。

それを横目に眺めながら、俺たちは2人で苦笑いした。

そう。これも問題だ。

牧野は非常に自分の容姿を気にしているが、マニア…いや、そういう容姿が良いという男は存外多い。ニコッとすると可愛いからな。

何だか和むんだよ。かいぐりかいぐりしたくなる。けど、そんな嗜好の奴は変態と紙一重だ。気を付けてやらないと、大変な事になる。

……しかし、マッキーの魔法使い…少し見てみたい気もするが…、いやいや、いかがわしい気持ちではないぞ。あくまで好奇心だ。

“マッキー安全保障委員会”この組織は、意外に機能していたらしい。それこそ、人の知らぬところでトラブルの芽は確実に摘まれていた。すげ～な。

「めぼしい奴、居ね～なぁ～」

「営業の今井さん、村田主任、企画の千葉、久保さん。あと…研究室の松井さん、和田係長あたりもいいんだけど…」

「「アウト！！」」

「そうだよな。あの人達が良いのは仕事の面だけ。プライベートはからっきしだしな～」

2号・3号は顔を見合わせつつ、呆れた顔をしている。

「あの人達、曲者過ぎるよな。」

「営業の今井さんは不倫中。村田主任は3回の離婚歴あり。企画の千葉さんと久保さんはゲイカップルで、研究室の松井さんは多重債

務者。和田係長は怪しい性癖があるって噂だ。」
「恋愛初心者のマッキーには荷が勝ちすぎる。」
「それ以前の問題だよ。」
「女子社員の評判は良さげなんだがな～。」
「彼女等は、奴らがどう破滅していくのか面白がって見てんだよ。」
「…黒いな。女は恐いな。」

2号はこめかみを押さえ、3号は両の掌を上に向け、欧米人がよする“ＷＨＹ”のポーズをとっている。
俺はうっすら生えてきた顎髭を撫でながら唸っていた。テーブルに何とも言えない空気が漂って来たので、手で髪を乱暴にかき回し、目に付いたつまみを離れたテーブルへ取りに行った。少し間を置こう。適当に皿に移していたら、結構な量になった。話に夢中になってて、あんま食べてないんだな、みんな。俺は料理を両手いっぱいに抱えて、2人の前に置いた。おっと、酒も頼んどくか。それから並べられた料理を3人で無言で食べた。
思考の波に揺られながら、沈んでしまわないよう考えを巡らす。俺はさっきから冷めたピザを無意味に箸でつついていた。

「…しっかし、ろくなの居ねぇなぁ～」

我が社で、本社勤務で、正社員となれば、実のところ女はほっとかない。ネームバリューがある為あまり無茶をする者は少ないが、取っ替え引っ替え、入れ食い状態だと言っても過言じゃあない。合コンじゃあ、選り取り見取り。まあそこそこの女なら、簡単に釣れてしまうのだ。よって、堅実でいい男は大概特定の恋人が居るか結婚していて、そうでない男は大いに独身貴族を満喫することになる。つついていたピザに程よく穴が開いた頃、3号が提案してきた。

「いっそのこと、社外の人間はどうだ？」

俺と2号はう～ん。と唸る。

「情報を集めにくい。リスクが高くないか？」

「う～ん。でも、頻繁に取引のある奴らとかなら探りやすくないか。」

「「例えば？」」

「あれはどうだ。マッキーにやたら話しかけてるの見た事あるぞ。ＨＡＹＡＳＡＫＡの技術の奴。結構男前だぞ。スポーツやってました。って感じでハキハキしてるし、守ってくれそ～って女子が…」

得意げに話し出した3号を、俺と2号は睨んでやった。ＨＡＹＡＳＡＫＡの技術の奴？とんでもない。

「お前、知らないの？あいつ、とっ捕まったぞ」

「何で！いつ！」

「先々週。うちの女子更衣室に隠しカメラ付けようとしてたらしい…マッキーんトコの綾乃主任と人事の八木沢主任が捕まえた。綾乃主任、以前から怪しんでたらしいぞ。」

「定点カメラにもばっちり映ってたらしい。」

「マジかよ…」

俺、出張してた～と3号は頭を抱えている。出張って言ったって、結構な噂になってたんだぞ。情報は営業の命。まだまだ甘いぞ3号。しかし、びっくりしたのが綾乃主任達だ。彼女等は、牧野にやたら絡むＨＡＹＡＳＡＫＡの社員を、随分前から訝しんでいたらしい。思わぬ伏兵だな。

ＨＡＹＡＳＡＫＡの社員も大概抜けてる。セキュリティも商品にしているうちの会社を出し抜こうとするとは１００年早ぇ。

「あっ、あれは?電車の君。」

2号がぽんと手を打つ。

「「電車の君?」」

2号が興奮気味に話し出す。

「ほら!女子組が言ってたろ。通勤電車にマッキーの事、熱〜い眼差しで見てる奴がいるって…あれ?」

「2号…お前は、遅れているな。」

「時代は常に動いているのだよ。残念だった。」

「…な、何だよ。」

「「そいつも先週捕まった。」」

「!」

「しかも、痴漢で。佐々木が“マッキーに懸想してるって?どんな奴か確かめなきゃ”ってチェックしに行ったんだよ。で、現行犯。でもって、ヤツが捕まえた。」

「佐々木が!?…ハッ、ま、マッキー被害にあったのか?」

「いや、女子コーセー触ってたの」

「マジかよ…俺がインフルエンザで休んでる時にそんな事が…」

おい、2号。お前も営業だろう。情報は営業の命…って3号め、さっきの仕返しとばかりに2号を苛めやがって。お前等同類。“五十歩百歩”“目くそ鼻くそ”だ。

「大体さぁ、年がいってる方々は、マッキーを孫でも見るような目で見てんだろ。その下は、幼女趣味の気(け)があるって、世の男共はどうなってるんだ!実にいかがわ…違った。嘆(なげ)かわしい。」

「選別が難しいよな。」
「あっ。ＮＯＢＩの御曹司は？年は…まぁ離れているが、マッキーと会わせてくれ。って言ってるって聞いた事あるぞ。まぁまぁの見た目だし、何より金持ちだ。会社の建て直しで婚期を逃したとかで、相手探している。って。」
「あぁ、あの人か。俺も聞いたな。」
「社外の人間だと、どう接点を作るのかが問題…てどうした？」
「…あの人なぁ。」
「何だ？」
「俺、打ち合わせに同席させてもらってたから見てたんだが…“かわいい。知り合う席を設けて欲しい”と懇願した御曹司を澤主任が一蹴したんだよ。もう、ばっさり斬り捨ててた。あれは、見てて哀れだったな。涙目だった。」
「は？何で澤主任が？」
「「…」」
「ハッ、もしやマッキーに気があるんじゃあ…」

「「「「……無いな。」」」」

「うん。それは無いな。」

「絶対無いな。」
「澤主任なら、マッキーをエサに仕事を取ってきそうな気がするんだけどな。」
「まぁ、アレだな、仕事に私情を持ち込むな。ってやつだろ。」
「そうだな。」
「そうだろ。」

澤主任は、仕事に厳しい。
間違えた。
仕事にも厳しい。打ち合わせで女の話なんざぁ、主任は我慢ならなかったんだろう。
そもそも澤主任は…

「あの人の好みは、マッキーと真逆だ。」
「そうだな。」
「某商社の秘書課のGさん、某地方銀行の窓口Aさん、ほにゃらら商事の営業Kさんと受付Hさん。それと…」
「おいおい。随分詳しいな。」
「好みがかぶってるんだよ！くっそう。間違っても主任には太刀打ちできない～。」

割り箸を投げ捨てて頭を掻きむしる3号。ご愁傷様。
澤主任の好みは、自分に自信を持っていて、仕事が出来て、尚かつ“女の薫り”ってのを漂わせているいる女性だ。3号が好みとかぶっていると言っていたが、本当にタイプにブレがない。
しかも…

「社内には女作らないよな。あの人。」
「うん。徹底してるな。」

面倒臭い事が嫌なのか、好みの女が居ないだけなのか、澤主任は社内で恋人を作らない。

「しかも、サイクル早いよな。」
「取っ替え引っ替えだな。」
「仕事が出来て、男前。一流企業にお勤めで武道も嗜(たしな)んでるって、あの人出来すぎだろ？」
「あわよくば。って女が、多いんだな。」
「澤主任の好みのタイプの女くらいになると、そんじょ其処(そこ)らの男じゃ、満足出来ねぇよ。」
「連れて歩いたり、紹介するのに恥ずかしくない男、ってやつだな。」
「アクセサリーと一緒だな。」
「澤主任も、そういうつもりで選んでるんじゃないの？」
「そうだな。そういう女、似合うしな。」

居酒屋“かぁちゃん”の“おすすめ宴会・飲み放題コース”の締めである焼きおにぎりが出てきたところで、馬(おとこ)の問題は持ち越しとなった。
今のところ、本命と対抗馬（吉田と佐々木）のみだが、牧野にとっても同期にとってもまぁ、合格ラインだろう。
その気があるなら、さっさと口説けよ。お膳立ては、がっつりしてやる。
さぁ、面白くなってきたぞ～！

牧野の好みを全く考えず、どんどん話をまとめていく俺たちは、失念していた。
後(のち)に、賭けの対象にされていた事に激怒する彼女に、跳び蹴りされ

るなどとは…、この時は考えもしなかったのだ。

Ｕｎｃａｌｌｅｄ－ｆｏｒ　ｍｅｄｄｌｉｎｇ（大きなお世話）

Ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｆｉｇｈｔ　…？（次の戦いへ）

【 裏 】　同期会　～トトカルチョ～（後書き）

【裏】の【裏】好きになんてならない！

「取りあえず、マッキーの指導員、あの山口って奴書いとくか。」
「あの人かぁ～、マッキーが“毒にも薬にもならない人柄だ”って言ってなかったか？」
「…ひでぇ評価だな。」
「でも、普通っぽいよな。」
「普通だな。」
「…意外にそういう奴の方が合ってるかもよ。」
「普通だしな。」
「でもなぁ、邪な目で見る輩を、蹴散らす事出来んのか？」
「難しい問題だな。」
「まぁ、馬も揃ってないし、大穴狙いだ。書くだけ書いとくか。」
「そうだな。」
「普通っぽいしな。」
「普通だしな。」

本人の、全く与(あずか)り知らぬところで、全く失礼な評価をされているとは、山口は知るよしもなかった。
「へっくしょい！ん～風邪かな？」↑普通にいい人・山口

０６．　◆　マッキー安全保障委員会（前書き）

お気に入り登録・評価、本当にありがとうございます。
すっごく、すっごく励みになります。
すっごく、すっごく力になります。
本当にありがとうございます。＞（＿　＿）＜

06. ◆ マッキー安全保障委員会

――――これ、かえってマズイキガスル。

直美は、突き刺さる視線に、顔を上げられずにいた。

※ ※ ※

や暴風雨が治まるまでただじっとしていたかった。のに！

「あ～、帰りたくなってきた。」

「まぁまぁ、そう言わずに。」

社食の入り口で、呆然と立ち止まってしまった直美を、佐々木はくつくつ笑いながら席へと導いた。

「マッキー、ここ座れ。」

「マッキー、A定食は“生姜焼き”だぞ。それにしとけ。」

「B定食の“鯖のみそ煮”もおいしいぞ。」

「佐々木、取りあえず昼飯買ってこい。」

やつぎばやに話しかけられ、直美はたじたじになってしまう。

普段から、何かとかまってくる面々だったが、今日はあまりに世話を焼きすぎる。というが、はっきり言って五月蠅い。

佐々木は未だくつくつ笑いながら、流れるような所作で椅子を引き直美を座らせた。

彼は帰国子女の為、時々嫌みもなくジェントルマンな行動を取る。しかも、今のところ直美限定だ。

本人曰く『僕の溢れる愛情を注ぐ場所がない。寂しくて心が死んでしまいそう。』だそうだ。彼は現在、アメリカの大学に進学してしまった妹の代わりに、直美を愛(め)でている。入社早々妹への深い愛を語り“期間限定で妹の代わり”をしてくれ。と懇願した。

直美は訝しげに思いながらも、これまで生きてきて女性扱いされた事など無かった為、お姫様気分を楽む事にした。

大切に丁寧に扱われる事が初めてな彼女は、少しくすぐったく思いながらも、されるがままに過ごす事にしたのだ。

ちなみに期間限定なのは、妹が卒業して日本に戻れば妹を愛(め)で、アメリカで就職するなら、佐々木もアメリカの支社へ転勤希望を出す

のだそうだ。
まったくもって、筋金入りである。

「取りあえず買ってくるよ。牧野は、何が良い？」
「あ～、Ａ定食の“生姜焼き”」

げんなりした様子の直美を見て、にこにこ微笑んでいる彼に、直美は自分のネームプレートを差し出した。

「いいよ。社食くらい、ごちそうするよ。」
「ダメだよ。ちゃんと払う。」
「…じゃあ、食後のコーヒーをご馳走になるよ。」

佐々木は直美のネームプレートを受取り、席を立った。
直美達の勤める会社は、ネームプレートのチップを読み込み、社食・自販機などで購入した物は、給料から天引きされる仕組みになっていた。
社の出入り口にもセンサーが設置してあり、社員の入社・退社時刻も自動的に記録されるようにもなっている。また、各フロアーに入室する際も、プレートがないと入れない。
それは、セキュリティーも商品にしているこの会社が、自社開発したシステムで、研究室のメンバーはこれを利用し、日々研究を重ねていた。一般社員には知らされてはいないがその他にも、色々仕掛けがしてあるらしい。

佐々木が立ち去った後ろ姿を、直美はぼんやり眺めていたが、ふと振り返った彼に微笑まれ、直美は慌てて視線を戻した。そして戻した視線の先には、…何やら未だテンションの高い田中～ズが、“生姜焼き”の味のしみ具合を絶賛し、“鯖のみそ煮”を褒め称え、生姜の効き具合について、どうでも良い論争を繰り広げていた。

――何でこんなくだらない事でこんなに盛り上がれるんだろう？
直美は論争に加わることなく、呆れた目で眺めていた。突然話を振られたり、意見を求められたりしたが、きっぱり無視を決め込む。
やがて3人はヒートアップしだし、生姜の名産地・保存方法・歴史などに話が及び始めた頃、佐々木が食事を手にして戻って来た。

「お待たせ。さぁ、食べよう。」

やさしく声を掛けられて、一同はやっと落ち着きを取り戻した。
彼のおかげで無意味な論争から解放された直美は、尊敬の眼差しを佐々木に向けた。
手を胸の前で組み、目をキラキラさせ、ぱちぱち何度も瞬きをして喜びを伝えた。
すると佐々木は、またくつくつ笑いだし、そんなにお腹減ってたの？なんて言って微笑んだ。
直美は不覚にも、その眩しさにちょっと怯んでしまい、慌てて『いただきます。』と手を合わた。
こくん。とおみそ汁を一口飲んで、色々な意味で一息ついた時、ふと、異常に視線が集まっている事に気が付いた。
週末の余韻で注目されているのは知っていたし、気にしないようにも努めていたが、どうも視線が突き刺さる。なんだか、グサグサいや、ばっさばっさと斬りつけられるようだ。やけに攻撃的な雰囲気に恐る恐る視線を巡らし、やがてある事に気がついた。
何だか悪い予感が的中している気がして、直美はがっくりと項垂れる。

――――がぁ！失敗した！！この視線はこのせいか！！こいつらがもてるの忘れてた。

彼女の周りには現在、同期がぐるりと囲んでる。問題は、この同期だった。
直美が入社した、０９年入社組は“当たり年”と言われていた。仕事の出来る、いい男が揃っていた為だ。
特に、佐々木　修・吉田弘司はツートップと呼ばれていて、会社に多くの利益をもたらしており、また飛び抜けて容姿も良かった。
佐々木は一言で言えば爽やか。清潔感にあふれ、物腰も柔らかく女性に優しい。
吉田弘司は、社交的で顔が広い。人当たりが良く誰にも壁を作らない。一見軽そうに見えるが、ちょい悪な感じがまた良いらしい。
さらに納得いかないのが田中～ズだ。彼らも佐々木・吉田ほどではないが営業成績がよく容姿も良い。
直美は、彼らの崩壊した性格をよく知っていたので、特にときめく事もなく過ごしていたが、社の女性達は違っていた。出世が見込めて、見た目も体躯も良い。彼女等にとっては超優良物件なのだ。

――――納得いかないのよね。あたしに言わせりゃ、シスコンに、チャラ男に、団子3兄弟なのに。

理不尽な気持ちで、たくわんを突いていると、佐々木と1号が声をかけてきた。

「牧野、鯖好きだろ？半分あげるよ。」
「あ…ありがとう、修ちゃん。じゃ、あたしの生姜焼きもあげる。」
「マッキー。白飯よこせ。食いきれないだろ？」
「う…うん。」

直美は、背筋がぞくりとした。

――やばい。そして痛い。視線が痛すぎる。

イヤな汗がツツリと流れる。こんなにちやほやされては、さらに誤解されてしまう。端(はた)から見れば、逆ハーだ。

――あぁ、あの女子達の目…男をたらし込む魔女？尻軽女？罵詈雑言が聞こえる気がする。いや、これは確信。絶対言ってる。

週末、澤主任（冷徹魔神）に刃向かった事で目を付けられて、蘭菊さんの乱入で澤主任に懸想していると勝手に認定されて、すでに多くの女子社員を敵に回している。

さらに、もてる男達にこんな女王様的な扱いを受けていれば、これまた更に、多くの女子を敵に回してしまう。

直美は未だ顔を上げられないまま、わなわな震えた。

――もう全部1号のせいだ！“マッキー安全保障委員会”なぞ死滅してしまえ！

そして目の前の鯖をぐさりと突き刺した。

――大体ふざけてんのよ。あの計画書！

週末、高らかに発足された“マッキー安全保障委員会”は完璧なまでに機能していた。

今朝、最寄りの駅に美咲と由香の女子組が待っていてくれたのだ。

“例の事件”は、予想以上に隅々まで社内に響き渡っていたようで、直美はげんなりしたが、2人が一緒に社内に入ってくれたため、好

奇の目から逃れる事が出来た。――ちなみに経理課は安全だった。綾乃主任が目を光らせていたからだ。それが無くても、経理課の面々は、澤主任に刃向かった直美をリスペクトする勢いだったため、彼女が嫌がらせをうける事はなかった。

朝礼の後、仕事を始めた直美の元に、次々と同期からメールが舞い込んで来た。
それはどれも大げさすぎる励ましの言葉で直美は思わず笑ってしまったが、その心遣いは彼女の心をとても温かくさせていた。
そのメールの中に、ちょっと気になるものを見つけた。送り主は“田中１号”だ。

――――件名：“マッキー安全保障委員会”？

『我らがマッキーが危険な目にあっている。我々０９年入社組はこれを見過ごす事は出来ない。従って、先週末“マッキー安全保障委員会”を立ち上げた。皆の衆、心して掛かれ！委員長　田中　利一』

直美は添付されているファイルを開いてみた。するとそこには、計画書なる物が現れ、事細かく指示されていた。概要はこうだ。
その１・絶対直美を一人にしない事。（出勤時・昼食時・退社時いずれも直美を一人にしない）
その２・直美は出勤・昼食・退社時刻等のスケジュールを佐々木修へ連絡する。
その３・佐々木から担当者へ任務を言い渡す。

――――一体何処のＳＰだ！てか、監視されんのあたし？

田中1号の計画は、外部からの悪意を取り除くと言うよりも、直美にまとわりついて、彼女を監視する意味合いが濃い。…気がする。何故なら計画書のずっと下の方に見落としそうなほど小さく“注意事項と報告義務”の記載がされてあり、それをよく見ると以下の事が記されていた。

＜以下を報告せよ＞

・マッキーがいつ誰とどういう会話をしたか。

・どんな服を着ていたか

・何を食べたか

・健康状態・機嫌は良いか？悪いか？

・マッキーの体重と体温

――何よこの“体重と体温”って、どうやって計るつもりなのよ。てか、なにげに身長を測れと書かれてないのがムカツク！まだ伸びるわよ。希望は捨ててないんだからね！

完全に悪のりしている同期達に頭が痛くなってきた。こっちはこんなに忙しいのに、煩わしさが倍増だ。

――あぁ、もう何もかも、どうでも良くなってきた…。てか、仕事しようよ～。

直美は天井を仰ぎ見て、大きく溜息をつくと、メールを“ゴミ箱”へとを移した。

やっと昼食の時間が取れそうな直美は、佐々木にメールを入れた。

『件名：牧野です。

本文：ごめんね。田中1号に脅迫されてメールしたんけど…３０分位したら、社食へ行けそう。』
『ＲＥ：件名：牧野です。
本文：お疲れ様。大丈夫、迎えに行くよ。待ってて。』

普段はお弁当を手作りしている直美だったが、この時期は全く余裕が無くなるので、社食で済ますようにしていた。社食の利用時間は１１時～１４時と決められているため、それに合わせて強引に時間をあける。こうでもしないと、休めないのだ。
そして３０分後、佐々木が時間通りにやって来た。

「牧野。お昼いこ。」
「うわ～。ホントに来た。」
「当たり前だろ。俺たちはやる気だよ。」

うんざりした顔をした直美を見て、佐々木は肩を振るわせて笑った。

「牧野、覚悟決めろよ。では、姫様。参りましょう。」

彼はまるで執事のような態度で、うやうやしく直美をエスコートした。

何故こんな事になってしまっているのか自問自答しながら、出来れば思い出したくない記憶を辿っていたところで、馴染みのある声が届いた。

「あっ、いたいた。」
「「「おぅ。ヨッシー」」」
突然叫ばれた名前に、直美はがばっと顔を上げた。
軽く右手を挙げここちらにやってくるのはヨッシーこと吉田　弘司（よしだ　ひろし）だ。

――あっ、ヨッシーだ。

彼の姿を認めた瞬間、心臓がドクンと音を立てた。急に大きくリズムを刻みだした胸は全く落ち着く様子がない。もの凄い勢いで体の中を巡りだした何かが、心の中をグルグルし出し、気持ちと混ざり合いマーブルな感じになった。
直美は、釘付けになりそうな視線を無理矢理振り切って、ご飯をもきゅもきゅ頬張ってみた。味が全く感じられなくなってしまったが、何でもない風を装って、懸命に食べた。

「おっ、マッキー生姜焼き？俺もそうしよっかな！」

急に耳元で紡ぎ出された言葉に、直美はびくりと体を震わせた。反射的に振り返ってしまってそのことを酷く後悔する。

――近っ！。顔近っ！

吉田は直美を囲うように手をつき、彼女と顔を並べていた。振り向いてしまった自分の唇と彼の頬が触れるほど近い。直美は慌てて体を仰け反らし距離を取った。

近すぎる距離を全く気にする素振りも見せず、彼は目を合わせてきた。『おいしかった？』と首をかしげ微笑まれ、再び心臓をわしづかみにされる思いがした。

「……う……うん。」

息苦しさを感じながら、ようやく絞り出した声は震えていないか心配になったが、それよりも重大な問題が持ち上がった。
彼の唇から目が離せなくなってしまったのだ。
とたんにあの夜が脳裏に浮かんだ。
右肩にちょこんと乗った頭。首筋にかかる彼の髪が風に捲かれてくすくす擽（くすぐ）る。
長身な彼は少し窮屈そうに体を曲げていた。
寒さに強ばった体が、触れている箇所だけ柔らかく温かい。
意外と長いまつげが小刻みに震えるのをぼんやり見ていたら、やがて、この、唇が…下唇だけ少しぼったりしている、この、唇が……

「っ～～～～～っっっつ！」

ボンと音がしたんじゃないかと思ったくらい勢いよく、一瞬にして顔が赤くなる。自分で自覚するも、どうにもならない。
その間も視線は外せず唇を凝視していて、もう耳は痛いくらいになっている。
心臓も耳にあるんじゃないかと思うほど、酷いテンポで音を立て、何か得体の知れないものが出て行ってしまいそうで慌てて口を手で

押さえた。

――ダメ。無理！もう無理！

思わず涙目になった直美は、勢いよく席を立つ。

「あ、あ！あタし、仕事がア、あるんだった。モう、行かなきゃ～～～！」

そろりそろりと一歩一歩後ずさりながら、、最後にはダダダ～と音がする勢いで、あっという間に社食を飛び出してしまった。あまりの素早さに、一同は呆然としつつも、一早く我に返った3号が『ハッ、俺送ってくる。』と慌てて後を追いかけた。

「――何だったんだ？一体」

「…さぁ」

未だに何が起きたかよく解らない一同は、口をあんぐりとしたまま、急に挙動不審になった彼女が、消えていった方向をぼんやり眺めていた。

やがて吉田の笑い声がその場に響く。

「くくくくくっ。かわいいな。マッキーは」

肩を揺らしながら吐かれるセリフに、一同は揃って片眉を上げた。

「……お前、牧野に何かしたのか？」
地獄の使者と見紛(みまが)う声と表情で、佐々木が静かに問う。

「さぁてね。…ヨッシーってば、分かんなぁい。」
「…ほぅ？」

睨み付ける佐々木と、挑戦的な吉田の目が激しくぶつかる。バチバチと感電しそうな勢いだ。
顎を撫でながら2人を眺めていた1号はこっそりほくそ笑む。
チラリと視線で合図を送ると、未だ口を半開きにしたままだった2号が、息を飲むのが分かった。

――俺が言った通りだろ？

もう一度彼女が逃げていった方向を見てから、対峙している男達に視線を戻す。

――本腰入れて来るヤツが出てくるって。

今度こそ1号は、満面の笑みをその顔に浮かべた。

※ ※ ※

騒がしい社食の一角に、仕切られているスペースがあった。世間の目が厳しく肩身の狭くなった、喫煙者用のコーナーだ。そこは、何故かマジックミラーのようになっていて、一般席からは中が覗けないようになっていた。
そしてそこに、先程から直美達の様子をじっと見つめている男がいた。

「随分にぎやかだよね～。」

目線で集団を指し、背後の男性ににこやかに話しかける。
コーヒー片手にだるそうに腰掛けているこの男は、八木沢　孝高（やぎさわ　よしたか）澤の同期で人事課主任だ。澤と並び、スピード出世を遂げていた彼は、人当たりも見目も良く、彼と並んで狙う女子社員は多かった。

「五月蠅いだけだ。」

言い捨てたのは澤　重治（さわ　しげはる）直美と同様、渦中の人物だ。
コーヒーカップを弄びながら溜息を一つこぼすと、八木沢がこちらに向きを合わせた。

「お前に噛みついたんだろ？牧野ちゃん。」

見たかったなぁ。と囁き、長い足を投げ出し組み直す。澤はニタニタ顔が癪に触ったが無視してコーヒーを一口飲んだ。

「どうせ、カメラで見たんだろ？渡辺弟あたりが喜々として見せそ

うだ。」
「ご明察。笑わせてもらったよ。」
渡辺とは澤達の同期で双子の兄弟だ。、システム3課の主任が弟で、第2研究室室長は、兄だ。ちなみにこの兄は経理課の綾乃主任の旦那に当たる。
八木沢の肩は、先程からずっと小刻みにふるえていた。いっその事、声を出して笑えば良いのにと、澤の眉間に皺がよった。
「助けに行ったんだろ？」
「…間に合わなかったがな。」
「ひ…ヒーローは遅れてやってくるもんだか…ぶぶっ。」
八木沢は、とうとう吹き出した。それを横目で見ていた澤は、眉間の皺をより深くさせた。吹き出されたらされたで、無性に腹が立つ。
「綾乃さん、怒ってたぞ。牧野ちゃん、怪我して帰ってきたって。お菊め！抹殺してやる。って息巻いてた。」
澤は、無言でまた一口コーヒーを飲み、八木沢は手にしたタバコに火を付けた。
「しかし、五月蠅いな。」
「な、ホント仲が良いよな。アレだな、牧野ちゃんを本社勤務にごり押しした、俺の手柄だな。」
2人は騒がしい集団を一瞥した。
「みんな、牧野ちゃんを守ろうと必死だな。」
「…」

「お前とやり合って、蘭菊ちゃんに睨まれて。奴ら心中穏やかじゃ無いだろうよ。」
「…。」

八木沢は視線を外し、窓の外を見た。
分厚いガラスを一枚隔てたそこには、都会の町並みとどんよりした空が見える。降るのか降らないのかはっきりしないこの雲は、真冬独特の空の日常だ。
たゆたう煙を目で追いつつ、何をするでもなくぼんやりと再び視線を直美達に戻そうとした時、２人同時に着信音が鳴った。澤は内ポケットから携帯を取り出すと、メールにさっと目を通す。そしてすぐそれを無言でしまった。
八木沢はそんな澤をみて、自分もメールに目を通すと、彼に問いかけた。

「そっちも、綾乃さんから？」
「あぁ。」

八木沢は素早くメールを返信すると、今まで以上に深く椅子へ体を預けた。

「残念だな。」
「あぁ、残念だ。」

ぽつりと呟かれた言葉に同意が返る。
２人はしばし外を眺め、やがてまた呟いた。

「ホントに残念だな。」
「あぁ、……残念だ。」

溜息をついた2人は動くことなくぼんやり外を眺めていた。
澤はぐしゃりと紙コップを潰し、八木沢はそれを横目で確認しつつ、深く深くタバコを吸い込んだ。
吐き出される煙は、グレーの空と程よく馴染んで、やがて広く薄く、周りの空気に吸い込まれてしまった頃、2人は静かに席を立った。

Better be safe than sorry…（安全第一）
The next fight…？（次の戦いへ）

06．　◆　マッキー安全保障委員会（後書き）

【裏】好きになんてならない！

～お菊さんの日常～

「ガガッ…。蘭様、牧野さんが企画室へ向かいました。どうぞ。」
「…了解。プツッ。」
「ガガッ…。蘭様、牧野さんは、室長にケースを渡しています。あっ、お礼に何かもらっています。……辰乃亭のどら焼きです！出張先のおみやげの様です。どうぞ。」
「…了解。プツッ。」
「あ～、宮園君。」
「あら、斎藤専務。宮園なんて、水ください。“蘭”とお呼び下さいませ。」
「うん？あぁ蘭君。聞いても良いかい？君は、一体何を…」
「ガガッ…。蘭様、大変です。澤主任が外回りに出かけられます。どうぞ。」
「あら、大変。今すぐ向かいます。エレベーターのボタンを押しておいて頂戴。プツッ。」
「…了解。ガガッ…。」
「斎藤専務。申し訳ありません。急用が出来ましたの。失礼いたしますわ。」
カツカツカツカツ　↑ヒールの音
「…蘭君。君は一体…」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6600x/

好きになんてならない！

2011年11月10日03時04分発行